

未来へ繋ぐ

秋田県能代市立東雲中学校

三年 細野愛子

「また明日ね。」

私の水泳のコーチは毎日のように言ってくれた。練習を終え、ぐったり疲れた私に、何回も何回も…。

でもこの頃の私は、笑顔で返事を返すことができなかった。今振り返ると、私の心の中には、どす黒くもやもやした得体の知れないものがいつも渦巻いていたような気がする。

今年の二月、父の新潟への転勤が決まった。私の父は火力発電所で働いている。私は以前、父の転勤で新潟から秋田に引っ越してきた。あれから十一年。そろそろだろうと覚悟はしていたものの、いざ父が転勤するとなると、とてもショックだった。

「仲のよい友達と離れてしまう。大好きな先生に会えなくなってしまう」という気持ちと、「父が単身赴任でいなくなってしまうのは嫌だ」という気持ちで、混乱していたのだった。四六時中、『転校』という言葉が頭の中でぐるぐる回っていた。

動揺する私を見かね、私の転校は一学期終了後に延ばしてくれたものの、私は寂しさと不安から、笑うのも辛くなり、家でも学校でも泣いてばかりの日が続くようになった。そのうちに、そんな自分自身が嫌になり、すべてがマイナス思考になってしまっ

ていった。「こんな自分の姿、水泳の仲間には見せたくない」という思いが頭をもたげ、一週間以上も練習を休み続けた。週末に予定されていた大会も棄権。「もうどうにでもなれ」。完全に自分を見失っていた。

大会を棄権したその日の夕刻、コーチが私を氣にかけて電話してくれたことを母から聞いた。コーチや仲間に関心させて申し訳なく思った。「また明日ね」と優しく語りかけるコーチの顔が思い浮かんだ。

そういえば、コーチの言葉は、今日頑張った自分が認められたような気がしてうれしかったな。「また明日も頑張ろう」と前向きな力をもらえたな。そんなことをふと思いついていた。一週間余りの時間がもう何年も過ぎてしまったかのように、無性にコーチや仲間に関心しなくなった。私を応援してくれる人がいる、一緒に励まし合える人たちがいる、という思いが、水泳に足を向かわせていた。

久しぶりの練習場。ゆっくりと足を踏み入れた。足元からひんやりとした感覚が体全身に伝わってくる。いざ来てみたものの、やはり心がどきどきして落ち着かなかった。いつも練習をしてきた場所なのに、初めて連れてこられたかのように体がこわばり、私は目を上げることができないでいた。

そのとき突然、聞き慣れた声が私の耳に響いた。「大丈夫？ また一緒に頑張ろう。」

顔を上げるとそこには友達がいた。私をまっすぐ見つめる友達の笑顔があった。いつもと変わらない仲間たち。私をこれまで通り明るく受け入れてくれる。たわいもない話が私の心を落ち着かせてくれた。

思えば、水泳を始めたのは、水泳競技に興味があったのももちろんだが、新しい環境に早くなじむためでもあった。水泳を通して、たくさんの仲間ができた。そして他者への関わり方や気持ちの在り方を学

んだ。練習や大会を通して、元氣や笑顔、勇氣を与えられた…。そうだ、ここが私にとって大切な居場所なんだ。改めて実感させられた。

その日の練習後、

「また明日ね。」

久しぶりのコーチの言葉。「また、明日も頑張るぞ」。私の日常が戻ってきたような気がしてうれしかった。

コーチの言葉は、過去が今日へ、そして今日が明日に続いていることを意識させてくれる。過去に思い悩んだからこそ、今立ち直った自分がある。今の自分があるのは、過去の自分があるから。私の生きてきた過去はすべて意味のあるものだ。そしてこれからやってくる幾千もの明日につながっていく。人生はその繰り返しだ。

二期がスタートした。今私は、一週間後に迫った学校祭の準備に大忙しの毎日だ。私は現在の学校を卒業することに決めた。父には寂しい思いをさせるが、いろいろ悩んだ末の選択だった。

これからまた、自分の将来について思い悩むときもくるだろう。自分の未来を生きるために、まずは今日という日を精一杯生きようと思う。その今日が明日の自分をつくってくれればはずだ。